

道徳の自然化：工学的アプローチと道徳実践の行方

提題者・題目（発表順）

植原亮（関西大学総合情報学部）

「認識論と道徳への工学的アプローチについて」

塩野直之（東邦大学理学部・オーガナイザー）

「道徳の自然化は啓蒙主義の遺産を継承するのか」

金杉武司（國學院大學文学部・司会）

「自然化された道徳の実践と実在性へのコミットメント」

道徳の自然化は、道徳への「工学的アプローチ」の方向を進むという認識が共有されつつある。だがそれは具体的に、どのような問題を扱い、どのような方法をとるのだろうか。またそれは、われわれの道徳的価値観や道徳実践を大きく変化させるのだろうか。これらの基本的な問いに、まだ十分な見通しが得られているとは言い難い。そこで本ワークショップでは、まず植原が、道徳の工学化に肯定的な立場からその方向性を示す。次いで塩野と金杉が、懐疑的な立場からそれぞれ疑問を提起する。

植原の発表は、道徳の自然化と認識論の自然化の比較を通じて、両者がともに工学的アプローチによって取り込まれる課題となりうることを指摘し、道徳の持つ規範性が工学的な規範性として理解できることを明らかにする。そのうえで、認識と道徳のあいだにさらに具体的な共通点を見いだせるかどうか、また、両者に大きな相違点があるかどうかを検討する。

塩野の発表は、より現実の社会に目を向け、現代の道徳的価値観の根幹をなすと思われる人権の概念に焦点をあてる。とりわけ人権概念が、多様な人々の共存という近代的な課題の中で成立したこと、全ての人間に等しくあてはまるという強い普遍性を備えた理念的なものであることをふまえ、この啓蒙主義的な道徳概念を自然化された道徳学が継承しうるかどうか、問題提起を行う。

金杉の発表も、主旨としては塩野と同様の懸念を示すものであるが、植原の提示する工学的アプローチにより即した批判から出発する。すなわち、工学的アプローチでは道徳的価値が一種の道具的価値として捉えられることになり、われわれの実践が道徳を内在的価値とみなしていることを説明できないという批判である。金杉はさらに、道徳の自然化は内在的な道徳的価値の実在性を否定することになるため、われわれの道徳実践を大きく変容させる帰結を伴うはずだと論じる。

全体として、道徳の自然化や工学的アプローチの採用が現実のものとなるかどうか、また、そうなった場合にわれわれの道徳実践がどのようなものになるかは、直ちに答えの出ない困難な課題である。しかし本ワークショップは、この課題を少しでも明確にすることを目指し、またそのために、提題者間の討論だけでなくフロアとの意見交換を積極的に行う。